

AIに「質問する」段階から、AIに「任せる」段階へ。 「答えるAI」から「進めるAI」へ —AIエージェント、はじめての一步—

～聞けば答えるAIから、任せれば進めるAIへ。AIを"業務に組み込む"段階が始まっています～



ChatGPTやClaudeを試してみた。要約も文章作成も、たしかに便利だった。



ただ、そこから先に進めていない。
そんな声をよく伺います。

中小企業基盤整備機構が全国10,000社を対象に実施した調査(2026年3月公表)では、AIの導入率は20.4%。検討中(18.6%)を合わせると39.0%が前向きで、導入済み企業の82.6%が使っているのは「生成AI」でした。多くの会社が「AIに質問する」ところまでは到達しました。問題は、**その次の一歩がどこにあるのか**、が見えていないことです。その答えが、今回のテーマ「AIエージェント」です。

*参照:中小企業基盤整備機構「中小企業のAI等の利活用に係る実態調査」(2026年3月公表)

●国内企業のAI活用状況(2026年3月公表)



1. AIエージェントとは何か

ひとことで言えば、**ゴールを渡すと、手順を自分で組み立て、最後まで進めてくれるAI**です。これまでのチャット型AIは一问一答でした。指示するたびに人が結果を受け取り、次の指示を出す。人が手綱を握り続ける必要があります。エージェントは違います「未返信のメールを整理して」と伝えるだけで、

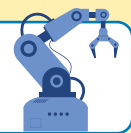
受信箱を読む → 返信が滞っている案件を抜き出す → 緊急度順に並べる → 一覧にして通知する

という手順を、**人が一度も間に入らずに進めます**。「何をすればいいか」を一つずつ教えるのではなく、「どうなってほしいか」を伝えれば、そこに至る段取りはAI側が考える。この転換が本質です。

「自動化」とは
別物です

自動化

決められた手順を
ボタン一つで流す



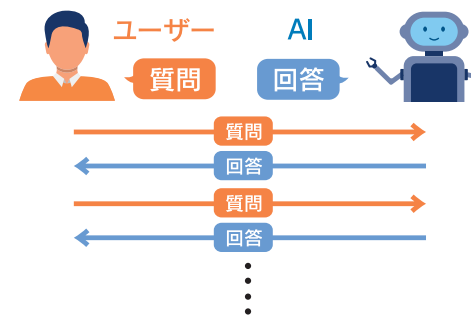
≠ エージェント

手順そのものを
AIが考えて動く

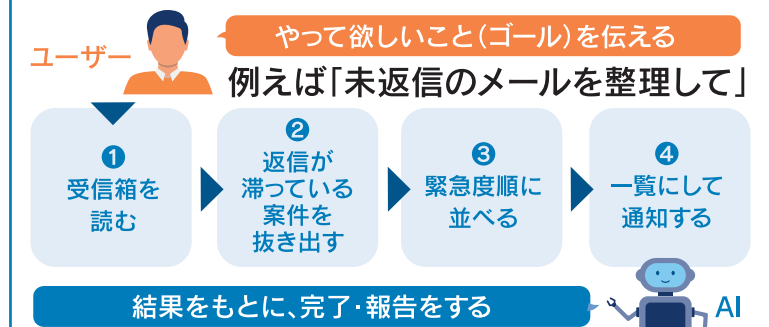


手順が決まっていない
仕事にも対応できる点が、
決定的に違います。

チャット型AI(一问一答)

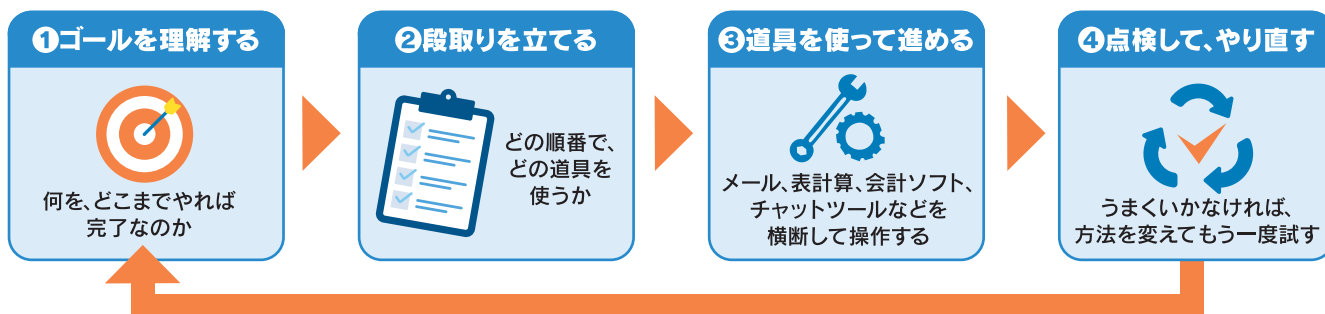


AIエージェント(目的から考えて、最後までやり遂げる)



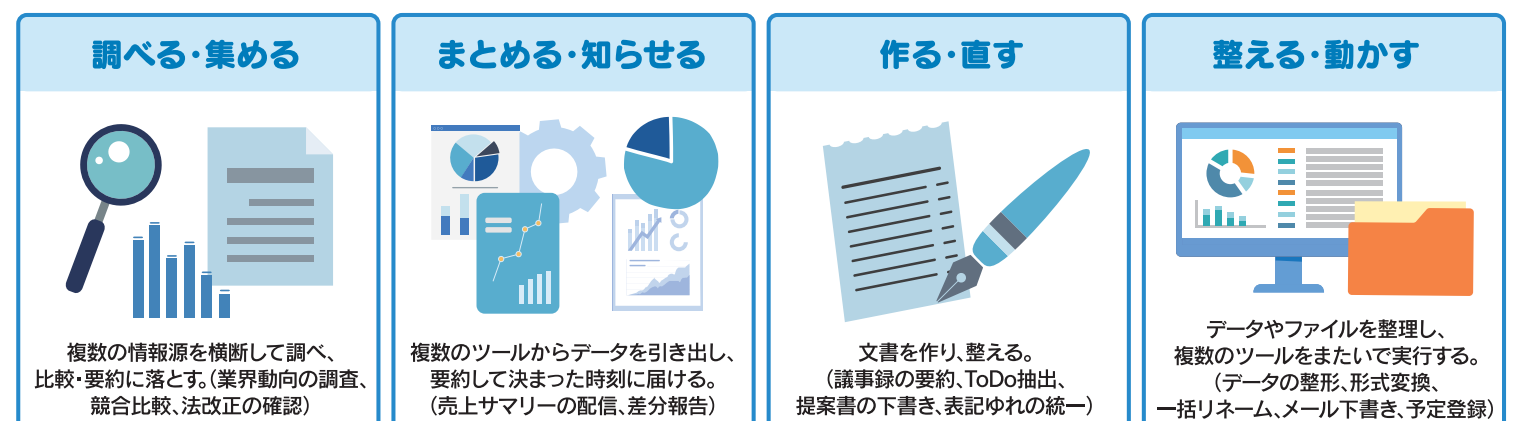
2. エージェントの「4つの動き」

AIエージェントの中では、次の4つが繰り返されています。



構造は、**新しく入った社員に仕事を頼むとき**と同じです。「先月分の請求書、まとめておいて」の一言で仕事が進むのは、相手が①～④を自分でやってくれるからです。特に重要なのは④。一度で失敗しても自分で気づいて修正できる。だからこそ、複数の手順にまたがる仕事を任せられるようになりました。

3. 何を任せられるのか — 4つのタイプ



共通しているのは、「**毎回発生するが、高度な判断は要らない**」作業であること。ここが主戦場です。

4. 実際に、こう動いています — 5つの事例

※いずれも、実際の企業で日常的に運用されているAIエージェントの活用事例です。

事例1 毎朝6時 未返信メールの棚卸し

メールを読み込み、返信が滞っている案件だけを抽出。緊急度順に並べ、滞留日数を添えてチャットへ通知。人は届いた一覧を見て「対応済み」「明日へ」を選ぶだけ。対応漏れがなくなります。



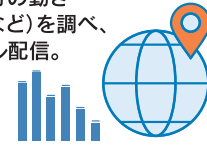
事例2 毎朝7時 会計データから、財務サマリーを

会計ソフトから当月の売上累計と口座・カード残高を取得し、要点をまとめてチャットへ投稿。月次では損益・貸借のダッシュボードまで出力します。「数字を見に行く」のではなく、「数字のほうから届く」状態です。



事例3 毎週 業界動向の定点調査

自社に関係する業界の1週間分の動き(新技術、規制変更、業界再編など)を調べ、重要なものだけ要約してメール配信。担当者が数時間かけていた情報収集が、出社時には手元にあります。



事例4 その都度 使いものにならないCSVを、読める表に

システムからダウンロードしたCSVは、見出しがずれ、日付や金額の形式がバラバラ——そのままでは集計できません。ファイルを渡して「見やすい表にして」と伝えるだけで、形式を統一し、不要な列を落とし、集計しやすいExcelに整えます。手作業で30分かかっていた前処理が、その場で終わります。



事例5 その都度 ダウンロードフォルダの整理

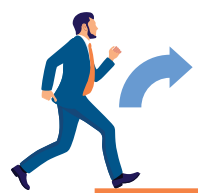
数百件たまった雑多なファイルを、種類ごとにフォルダ分けし、日付や内容がわかる名前に一括で付け替える。「どこに何があるか分からない」状態が、一度で解消します。



5つに共通するのは、「毎回やるが、頭は使わない」作業だという点です。任せる仕事は、まずここから探してください。

5. 仕事にどう組み込むか

◎入り口は、3つ



Lv.3 自社のツールにつなぐ
(数か月/外部パートナーの力が必要)
会計、顧客管理、グループウェアと接続し、社内の仕組みとして組み込む段階。

最初からLv.3を狙うと、
ほぼ確実に息切れします。
Lv.2まで進めば、十分に
手応えは得られます。

★おすすめのゴール

Lv.2 業務を1本、まるごと任せる(数週間~数か月)
決まった時刻に自動で起動させ、毎日・毎週の作業を1本だけ任せきる。

前ページの事例は、
すべてこの段階です。

Lv.1 今お使いのAIで、機能を試す(今日から)
契約済みの有償プランにエージェント機能が備わっている場合があります。

まずは一つの
作業から。

重要!
無料版では、
始められません

AIエージェント機能は、原則として有償プランでのみ提供されています。これは料金の話にとどまりません。エージェントは、メール・会計データ・顧客情報といった会社の重要な情報に直接触れる仕組みです。無料版や個人向けサービスは、入力した内容がAIの学習に使われる場合があります。責任の範囲も個人が負える範囲に限られます。社内の情報を扱う以上、法人向けの有償プランを選ぶことが大前提です。「無料で様子を見る」ではなく、「有償で、範囲を絞って、安全装置を効かせて始める」。これが、スモールスタートの正しい姿です。

Column 1 なぜ今、AIは会社の道具に手を伸ばせるようになったのか

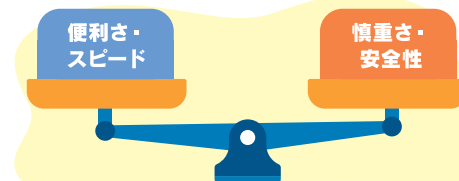
AIエージェントがこの1年で急速に実用化した背景に、MCP(エムシービー/Model Context Protocol)という接続の共通規格があります。かつては、AIと自社のツールをつなぐたびに、ツールごとの専用工事が必要でした。MCPは、その差込口の形を世界共通にそろえた規格です。パソコンのUSB-C端子を思い浮かべると、イメージが近いかもしれません。2024年11月にAnthropic社が公開し、2025年12月にはLinux Foundation傘下の中立団体へ移管。OpenAI、Google、Microsoft、Amazonなど主要各社が対応し、事実上の業界標準になりつつあります。AIが賢くなっただけではありません。AIが、会社の道具に手を伸ばせるようになった。これが、いま起きている変化の正体です。

*参照: Model Context Protocol 公式サイト(modelcontextprotocol.io)、Anthropic公式発表(2024年11月)、Agent AI Foundation(Linux Foundation/2025年12月設立)



Column 2 【重要】公的機関も、AI利用そのものをリスクとして位置づけています。

IPA(情報処理推進機構)の「情報セキュリティ10大脅威 2026」(2026年1月公表)では、「AIの利用をめぐるサイバーリスク」が組織向け脅威の第3位に初めて選出されました。AIエージェントは、社内のメール・ファイル・会計データに手を伸ばせる存在です。便利さと危うさは、まったく同じ理由から生まれています。だからこそ、始める前に3つを決める。「最小の権限から」「記録が残る形で」「最後は人が確認する」。これは脅しではありません。安心して任せるための、設計の話です。



バランスをとりながら、
無理なく
前に進めましょう。

AIを"戦力"にする3本の柱

① ゴールを渡す

一問一答の関係から、
段取りごと任せる関係へ。

② 小さく任せる

「毎回やるが、頭は使わない」
業務を、まず1本。
有償プランで、範囲を絞って。

③ 手綱は離さない

読むだけから始め、
最後のボタンは人が押す。

AIは、「便利な道具」から「仕事を進める存在」へと変わりつつあります。その第一歩が、AIエージェントです。

次回予告

8月号では、「業務の棚卸し — AIに任せる仕事の見つけ方」をお届けします。「任せられることは分かった。では、うちの何を任せるのか」——その答えを、一緒に探します。

※内容は予告なく変更する場合があります。

本資料は2026年7月時点の情報を基に作成しています。各サービスの仕様・料金・データ取得方針は変更される場合があります。最新情報は各公式サイトをご確認ください。
*参照: 中小企業基盤整備機構「中小企業のAI等の利活用に係る実態調査」(2026年3月公表) / 商工中金「中小企業の生成AIの利用にかかる調査」(2026年1月調査) / IPA「情報セキュリティ10大脅威 2026」(2026年1月公表) / Model Context Protocol 公式サイト(modelcontextprotocol.io) / Anthropic公式発表(2024年11月) / Agent AI Foundation(Linux Foundation/2025年12月設立)

ぜひ、ご相談ください!
御社のAI×
DX伴走パートナーで
あり続けます。

